

令和2年度(2020年度) 第3回学校運営協議会議録

日 時 令和3年(2021年)2月5日(金) 13:00～15:00

場 所 北海道釧路養護学校 集会室

出席者 学校運営協議会委員 北海道教育大学釧路校准教授 小野川 文子 様(会長)  
障がい者就業生活支援センター「ふれん」センター長(副会長)

高谷 さふみ 様

新橋第一町内会長

高橋 實 様

北海道社会福祉事業団白糠学園長

細川 和則 様

ゼペットの会会長

佐藤 みちる 様

釧路孝仁会看護専門学校副学校長

楠木 恵子 様

北海道釧路養護学校PTA役員

八幡 百合香 様

北海道釧路養護学校 校 長 小笠原 正樹(委員)

副校長 齋藤 利文(事務局員)

教 頭 三浦 一仁(事務局員)

事務長 山本 哲功(事務局員)

主幹教諭 佐々木 尚美

学部主事(小) 綾 公宏

学部主事(中) 志田 雅昭

学部主事(高) 東 裕子

教務部長(中) 井土 登美子

教務主任(小) 本庄谷 有希

教務主任(高) 桑原 洋樹

日程及び内容

13:00～ 開会・日程説明 副校長

13:05～ 校長挨拶 校長

学校運営協議会長挨拶 小野川会長

13:10～ 協議

本校の学校評価集計結果について 主幹教諭 資料配布・画面により説明

学校評価部会 進行 会長

「令和2年度学校評価 学校評価と学校経営」

副校長 資料・画面により説明

意見等

「安心・安全」について

委員 教職員がコロナ禍に抱えている不安に対するカンファレンスはあるのか

→特に設けていないが、道教委等から提示される指針を説明している

度重なる計画の急な変更を余儀なくされたところが大きな要因と類推する

司会 職員から具体的な困りごとと思われる点を先に出してもらいたい

小 校外学習、学習発表会等に制約に係る中、学びの保障をどうするか

消毒作業等の感染症対策に時間を取られている

マスクを着用できない児童の感染症

中 子供に感染させない、自身が感染しないことが最優先されることにより

ストレスのはけ口が無くなっている

調理実習等ができなくなり、どう満足感を補えるか

高 泊を伴う授業の計画変更により、どう満足感を補えるか

ひまわりフェスタ販売会の中止等内容変更により、どう満足感を補えるか

司会 次年度へ繋げるという観点からはどうか

委員 安心・安全に対し、コロナ禍の報道等の度に学校として確認した事項は  
→国・道教委等の通知をその都度即周知しているが、知らせるタイミング、計画変更の  
各部署との折り合いに苦勞する

委員 これを機会に、いろいろと見直すチャンスと捉えては

司会 各学部固有の問題と学校全体の問題をどう共有したか  
→毎月学部連絡会を開き、対策等を話し合い、職員会議で全体に周知している

委員 大学でも対面授業ができなく、各教授がそれぞれ個々に課題を出すと、一人一人の学生の負担が相当増えてしまっている

福祉の立場から、健康リスクと就労のバランスに苦慮している

職員の自己評価が低めなのは、計画が満たされていないからかと思う

変更を想定し準備を進めていく必要がある

施設でも外出が制限されたが、帰省はできる範囲で保護者の理解を得ながら進めた

職員の自己評価が厳しいのは、次の改善に繋がる意味ではよいこと

#### 「教育／指導」について

司会 具体的な工夫等はあるか  
→個別支援計画の読み合わせを年2回行っている

委員 コロナ禍を機会に、距離を置くこと等、障がい者の立場から必要性を訴えてきたことへの理解が、結果的に広まったのではないか

国民全体が障がい者の立場に置かれていると考えられるのではないか

学校の中にシステムとして専門性を高める工夫はあるのか  
→校内研修で、年間を通して共通課題を設けて進めているが、個人の研修に頼る部分は  
まだ多い

生徒の実態把握の資料を共通理解を目的に配布している

委員 研修の機会はオンラインにより増え、地域に差がなく参加できるようになっている

開催地への直接移動の必要もなく、もっと広まればと思う

自己評価と全体の評価は分けて

#### 「開かれた学校」について

委員 保護者へはこの学校評価の結果をどのように伝えるのか  
→ホームページへの掲載と資料配布を行う

司会 地域と学校との連携について感じていることは

委員 将来の生活に繋がる個人の情報は以前より受け入れる側には伝わってきている

個人情報保護の観点を最大限守ったうえで、工夫したやり取りを行っている

保護者と教員の子どもへの視点の違いが、集計結果に表れている

学校が地域にどう情報公開しているかという情報が少なく感じる

身近に当事者がいないと、一般の人は障がい者の立場に関心がなかなか向かない

地域が防災の視点からも、支援が必要な家庭への意識が向くような取組が必要

- 小中学校より広範囲の地域をどう設定するか
- 委員 居住地交流はできているか  
→感染症対策をとりながら行っている
- 「組織・計画」について
- 委員 職員が地震に責任を感じている結果だと思う  
職員の目標が高いことの現れだとも思う  
自己評価はもっと高く自信をもってよいのでは
- 司会 医療の立場からはどうか
- 委員 学生の実習において、障がいを持つことへの対応は臨床的に非常に貴重な体験となる  
感染症についての専門的な立場からの学びの機会があつてよいのでは
- 校長 制約から考えられる自主的なアイデアによる工夫が多く見られた  
PTA からも、活動が減る中、工夫した支援を得られている  
次年度の学校経営方針に活かしていく
- 会長挨拶 学校評価は、まとめるだけで終わらず、次につなげて生かしてほしい  
学部ごとの評価には違いがあると思うので、分析して方向性を  
コロナ禍により、当初は思考停止状態にあったと感じる  
考える主体は、学校現場の教職員である  
「できない」から「こうすればできる」という発想で  
次年度へ向けて豊かな実践を期待する
- 15:00 閉会